

宋代山水表現に於ける視覚と聴覚

田中 正樹（二松學舎大学）



宋代の蘇軾が王維の詩画について「詩中に画有り」、「画中に詩有り」と評したように、特に宋代以降「詩画一体」観が一般化する。「詩」とは、詩人が五官によって感得した自らを取り巻く世

界（景）、及びそれにより引き起こされた心的現象（情）を文字情報に定着する一種の記録／記憶装置といえる。士大夫（知識人）がそこに身を置くことを好む「山水」は詩の大ジャンルとして成立するが、「山水詩」には風景が形態・色彩・空間などの視覚を中心とした情報のみならず、音声（鳥

や泉の音）など五官によって感得された様々な事象が表象されている。つまり、「風景に音声が含まれる」ことを歐陽脩の「幽谷晚飲」詩に即して分析した。では、視覚表象としての山水画に音声は含まれるだろうか。この問題について、まず北宋の宮廷画家郭熙の画論「林泉高致」に優れた絵画からは「猿

聲鳥啼」が聞こえてくる、とする記述があることを確認し、次いで宮廷画家を選抜するに際し行われた「詩を絵画化」する試験で谷川の音を聴く場面が課題とされた例を挙げ、風景画には音声の存在に関する意識が必要とされること、つまり絵画には音声が含まれることを確認した。中国知識人の視覚は、まず作詩によって鍛えられたといつてよい。中国の視覚の在り方を詩表現から何うと特徴的な点が見て取れる。その一例を「如画」と「身在画中」という表現から分析した。実際の風景を「画の如し」と表現する例は南朝期には既に見えるが、南宋の陸游も「蘭亭禹廟山如画」と詠う。「如画」という表現は、言表しがたい「山水」の情景を読者が既に経験した絵画イメージ（脳内データ）に仮託することともいえる。類似の表現に「自身が絵画の中に居る（身在画中）」があるが、「如画」は認識主体（我）と対象（風景）とが未だ分離しているのに対し、「身在画中」は主客の一体化の表現として山水へのより深い没入のあり方と捉えているように思われる。

二松學舎大学文学部中国文学科教授。東北大学大学院文学研究科博士後期課程（中国学専攻）単位取得退学。専門は中国思想（宋代士大夫思想研究）、中国美学（中国芸術思想研究。論文に「秦觀「浩氣傳」について」（二〇一五）、「蘇軾「論語説」について」（二〇一三）、「中国の聴覚Ⅱ－風景に音声はあるか」（一九九八）など。